「『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」レポート　中村中学校　No.3－①

英語科

令和２年 12 月 18 日（金）教材研究会
◆ 第１学年「PROGRAM 9　A New Year's Visit」

今回の教材研究会・授業研究会が本事業の最終回です。
今回のレポートでは、英語・数学・美術科の実践とともに、「春季セミナーin 西部」を紹介します。

西部管内の講座関係のＨＰ

単元を描く

言語活動

◆ALT の家族にいつか四万十市に来てもらうために、Online で四万十市の魅力を伝える。

単元計画

相手のニーズに応じて、四万十市の魅力を整理し、写真や動画を用いながら、事実や情報を聞き手に伝える。

話すこと［発表］相手のニーズに応じて、四万十市の魅力を整理し、写真や動画を用いながら、事実や情報に加え、自分の考えや気持ちを入れて伝える。

パフォーマンステストで期待する生徒の発話例
Shimanto City is a good city. I have two good points. You like outdoor activities, right? First, I recommend Ultra Marathon. We have Ultra Marathon in Shimanto City. Look at this picture. This is a picture of Ultra Marathon. They are running 60 kilometers or 100 kilometers. It's exciting. Second, do you like fish? *Ayu* is good. *Ayu* lives in the beautiful river. The Shimanto river is very beautiful. You can eat delicious *Ayu*. Please come to Shimanto City.

☆パフォーマンステスト
・ALT の家族（４人中１人）に Online で四万十市の魅力を伝える。

第７時
・今までのフィードバックを再確認し、発表の際に注意するポイントを確認する。
・ALT の姉の詳しい情報を確認し、四万十市のどんな情報を伝えれば良いか整理する。
・整理した情報をもとに、四万十市の魅力を紹介する。
・表現したことを ALT に聞いてもらい、分かりにくい表現を全体で共有する。
・全体で共有したことを生かして、もう一度紹介する。・表現したことをノートに書く。

第６時
・ALT の母からのフィードバックを聞き、自分の気持ちや考えを入れると良いことを確認する。
・ALT の弟の詳しい情報を確認し、四万十市のどんな情報を伝えれば良いか整理する。
・整理した情報をもとに、四万十市の魅力を紹介する。
・ALT からのアドバイスをもらい、自分たちの表現に
・全体で共有したことを生かして、もう一度紹介する

【第６時】
ALT の母からのフィードバック
「自分たちの好きなものは？」
（期待される表現の向上）
自分のおすすめとその理由を伝える。
・I like (　　) because it is (　　).
・I recommend (　　) because it is (　　).

第５時
・ALT の父からのフィードバックを聞き、ALT の母の情報を
・相手のニーズを考え、写真または動画を用いながら、四万
・全体で表現を共有し、どんなことを伝えれば来たいと思
・全体で共有したことを生かして、もう一度紹介する。・表

【第５時】
ALT の父からのフィードバック
「さらに伝わりやすくするためには？」
（期待される表現の向上）
文章の構成に着目する。
・I'll tell you about A and B.
・I have two good points.
・First, (　　) is good.　Second, (　　) is good.

ALT の父からのフィードバック
　ただ話すだけでは伝わらない。
　いつ？どこ？などの情報があるとよい。
期待される表現の向上
　This is a picture of ~.
　They are running.
　You can canoe in summer.

第４時
・前時の学習を振り返
・写真または動画を用
・全体で表現を共有し
・全体で共有したことを生かして、
・表現したこと

第３時
・ALT の父からのフィードバックを、ALT から伝えてもらう。
・どんな情報を、どんな方法で紹介すれば良いか考える。
・ALT の自分の国紹介を聞き、良かった点を話し合う。
・教科書を用いて、状況を説明する表現を知る。
・数枚の写真や動画を用いて、四万十市の魅力を紹介する。

【第３時】ALT の父からのフィードバック
「ただ話すだけでは伝わらない。」「いつ？どこ？などの情報があるといい。」
（期待される表現の向上）
写真の状況を説明する表現・いつ、どこなどのより詳しい情報
・This is a picture of ~.・They are running.　・You can canoe in summer.

第２時
・ALT の父の詳しい情報を確認し、四万十市のどんな情報を伝えれば良いか整理する。
・相手のニーズを考えながら、四万十市の魅力を紹介する。
・全体で表現を共有し、自分の表現に取り入れられそうな表現を考え、再び整理する。
・全体で共有したことを生かして、もう一度紹介する。・表現したことをノートに書く。

第１時
・ALT とのやり取りの中で、ALT の家族がいつか日本に来たいと思っていることを知る。
・総合的な学習の時間で学習したことを振り返りながら、四万十市に来てもらうために、どんなことを教えてあげれば良いか話す。
・今まで学習したことを生かして、四万十市のことを紹介する。
・ALT からアドバイスをもらい、四万十市の魅力を伝え、来てもらうためには、相手のことを知らなければいけないことを知る。
・ALT の家族について質問し、情報を集める。

単元導入時の生徒の発話例
We have the Shimanto River. It is beautiful. You can swim. Please come to Shimanto City.

ここがポイント①

英語科では、「言語活動を通して資質・能力を育成する」ことが求められます。中村中学校では、単元を通して毎時間、四万十市の魅力について話す言語活動を設定し、「まとまりのある内容を話す」力を付けるための計画が考えられています。

また、単元を通して指導した結果、どのような内容や表現を期待するのか具体的なイメージを持ち（単元計画赤枠部分）、授業に臨めています。

ここがポイント②

言語活動に目的・場面・状況を設定し、生徒が目的意識をもって主体的に臨める工夫がされています。

授業では、１時間ごとに伝える相手を変え、ALT の家族の好きなことやニーズを把握させた上で、四万十市の何をどのように紹介すると良いか、見方・考え方を働かせて話させる計画が立てられています。また、伝えた ALT の家族からのフィードバック（単元計画　緑枠部分）を次の授業で伝え、内容や表現の質の向上が図れるよう見方・考え方を成長させる工夫もされています。

深い　学びの実現に向けて❶～齊藤先生からの助言～

“相手意識”をやり取りの中からつかむ

相手意識として、既に分かっている相手の好みやニーズに対応することは大事ですが、やり取りの中から相手意識を高めていき、次の文章を組み立てていくことも必要です。

“6/8 時間目の役割”を見直す

6/8 時間目には、それまでに再構築してきたプロセスを自覚化させ、マンネリ化させない工夫が必要です。できるようになったことを踏まえ、更に追究していく学びへと高めていく工夫が必要です。

“英語で思考する習慣”を身に付けさせる

英語の限界が思考の限界や表現意欲の減少につながらないようにすることが大切です。ALT の力を借りるなどして得意な表現ツールを増やし、英語で言いたいことを考えていく習慣を身に付ける支援をしていくことが大切です。

英語科　令和３年１月 15 日（金）授業研究会

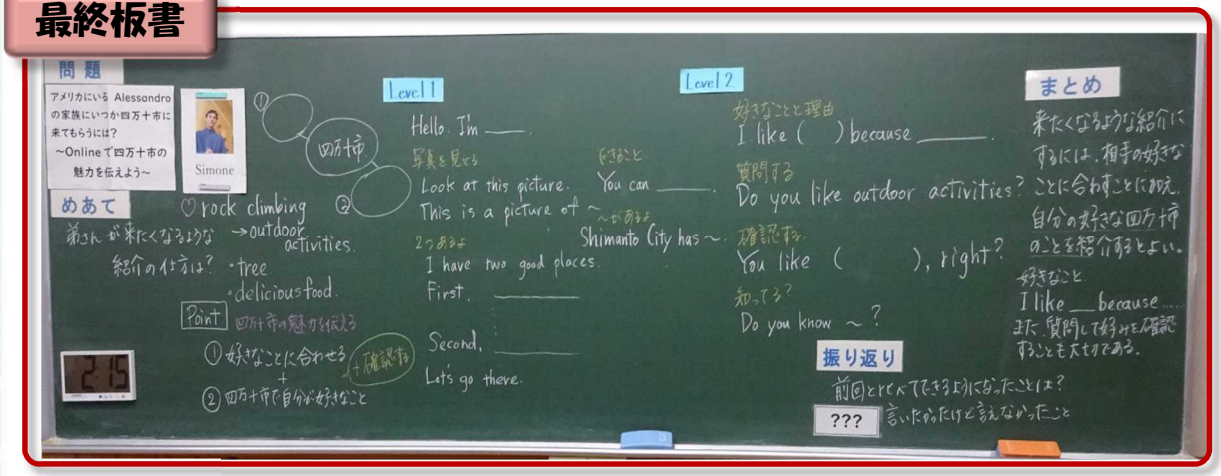
◆ 第１学年「PROGRAM 9　A New Year's Visit」廣瀬　涼子教諭

授業を描く

本時の目標

前時のフィードバックを生かし自分の考えや気持ちを入れながら、相手の情報に応じて伝える内容を整理し、四万十市の魅力についてまとまりのある内容で伝えることができる。

最終板書



学びを振り返る

深い　学びの実現に向けて❷～齊藤先生からの助言～

自分で言語活動を推し進め、"「なりたい自分」を更新" できる子供にする。

英語は言語活動そのものが能力であるため、生徒自身が"できるようになりたい"、"やってみたい"と思い、より豊かな表現を求めて言語活動を推し進めていく必要があります。そのためには、教師の仕掛けや動機付けとして、これまでにどんなことが言えるようになっているのか、こういうことが言えるためにはあと何が必要かを自覚させることが大切です。ALT や教師を相手として話したり、指導者たちの発話を聞いたりして、その内容や表現から学ぶことも１つのきっかけとして考えられます。「なりたい自分」を更新し、それを試してどうだったか、何ができるようになったかを自覚し、表現等の質の向上へのステップを上らせることが大切です。

"見方・考え方を成長させる" 授業に変えていく。

英語は、表現の意味的理解を伴わなければ会話の質が上がっていきません。こういう時にはどのような表現を使ってどのような内容を伝えるとうまくいくのか知っていることが大切であり、そこに生徒の関心を置くような授業に変えていく必要があります。これからの授業は、教科の本質である見方・考え方を成長させることが大切です。

ここがポイント③

授業の導入場面では、考える視点の入っためあてや、本時に意識する点としてのポイントを生徒と共有しています。これらを引き出すために、前時に伝えた ALT のお母さんからのフィードバックを聞かせたり、本時に伝える相手となる弟さんに関する情報を振り返ったりしています。本時の目指す姿に向けたこれらの教師の意図的な仕掛けにより、生徒は紹介したい場所や内容のイメージを膨らませ、発表場面で聞き手を驚かせる場面もありました。

ここがポイント④

中間指導では、本時に意識すべき点を基に話すことができたかの確認やその際の表現を共有し、板書で可視化しています。また、更なるポイントとして、相手に質問したり確認したりして伝える内容を考えていくことも共有しました。

友達や ALT との対話の中では、ALT から質問を受けた生徒がその内容を加えて次の友達に発表し、友達の発表に対してもその視点をアドバイスする姿が見られました。中間指導や ALT、友達からのアドバイスにより、生徒全員の表現が回を追うごとに内容面・言語面ともに改善されていきました。

授業研究会を終えての声

- 毎年新しい発見がありました。相手のニーズに合わせて紹介していくという視点が大変勉強になりました。
- 生徒が主体的に活動に取り組み、見方・考え方を発見できる授業となるよう工夫していきたいです。
- 今後の授業では、英語表現の使い方や良さをしっかりと生徒に理解させたいです。また、生徒が見方・考え方を働かせ成長している姿を能力として分析し、評価しなければならないことが分かりました。

生徒自身が言語活動を推し進めていけるような単元計画、教師側の仕掛けを考えながら、１ 時間ごとの生徒の姿をイメージしていきたいと感じました。「Less is more.」を目指して、単元の創り方から、もう一度再スタートしていきたいです。

廣瀬　涼子　教諭

数学科

令和２年 12 月 18 日（金）教材研究会

◆ 第２学年「図形の合同」

単元を描く

単元を貫く問い

◆直感的に捉えた図形の性質や関係を、論理的に考察し表現するためにはどうすればよいだろう？　～図形の性質を演繹的に確かめることを通して～

単元計画

数学的活動

操作、実験などから図形の性質や関係を見いだし、仮定と結論を明示して数学的な表現を用いて説明し伝え合う活動

既習の図形の性質などを用いて新たな性質や関係を証明し、その過程や結果を振り返ったりして、統合的・発展的に考察する活動

日常の事象から問題を見いだし、解決して得られた結果を意味付けたり活用したりする活動

【６時間】
問い　二つの図形が合同であることを移動以外に判断するには、どうすればいい？

■図形の移動をもとに、二つの図形の合同について考え、重ね合わせることなく二つの三角形が合同か判断するにはどうすればよいかを考える。(D2)
■これまで学習した図形の基本的な作図の方法を三角形の合同をもとに、確かめる。(C)

【７時間】
問い　もとの三角形を移動させてできる特別な三角形は、どんな特徴があるのだろう？

■直角三角形を移動させ、組み合わせてできる図形を観察し、二等辺三角形の性質や三角形にどんな条件が加わると二等辺三角形といえるか考える。(A2)
■二つの直角三角形の合同について、三角形の合同条件をもとに考える。(D2)

【１０時間】
問い　もとの三角形を移動させてできる特別な四角形は、どんな特徴があるのだろう？

■二等辺三角形を移動させ、組み合わせてできる四角形を観察し、平行四辺形の性質や、四角形にどんな条件が加わると平行四辺形といえるか考える。(A2)
■長方形、ひし形、正方形と平行四辺形との関係を捉え、対角線の性質についてその逆が正しいかどうか考える。(A2)

【３時間】
問い　日常の問題を、図形の性質を用いて解決できないだろうか？

評価規準

［知］平面図形の合同の意味及び三角形の合同条件について理解している。
［知］証明の必要性と意味及びその方法について理解している。
［知］定義や命題の仮定と結論、逆の意味を理解している。
［思］三角形の合同条件を用いて、二つの三角形が合同であるかどうかを確かめることができる。
［思］図形の性質などを証明するために、構想や方針を立てることができる。
［主］証明の必要性と意味及びその方法を考えようとしている。

［知］命題の仮定や結論などを記号を用いて表したり、その意味を読み取ったりすることができる。
［知］二等辺三角形の性質を理解している。
［知］直角三角形の合同条件とその必要性を理解している。
［思］三角形の合同条件などを基にして三角形の基本的な性質を論理的に確かめることができる。
［思］証明を読んで新たな性質を見いだし表現することができる。

［知］三角形の合同条件などをもとにして平行四辺形の基本的な性質を論理的に確かめ説明することができる。
［知］正方形、ひし形、長方形が平行四辺形の特別な形であることを理解している。
［思］平行四辺形の基本的な性質などを具体的な場面で活用することができる。
［主］平面図形の性質を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしている。

［思］三角形や平行四辺形の基本的な性質などを具体的な場面で活用することができる。
［主］図形の合同について学んだことを生活や学習に生かそうとしている。

ここがポイント①

　これまでの指導では、筋道を立てて正しく証明することの指導に力を注ぐあまり、三角形と四角形の学習がそれぞれ独立したものになる傾向がありました。また、生徒が主体的に証明しようとする姿が見られにくい等の課題もありました。本単元計画では、直角三角形を対称移動させることで二等辺三角形がつくられ、二等辺三角形を回転移動させることで平行四辺形がつくられているなど、図形の構成要素や対称性に着目し、三角形と四角形がつながるように工夫されています。

ここがポイント②

　本単元では、図形を十分に観察することで、性質や条件を生徒自身が見いだし、主体的に証明していけるように計画されています。数学的推論には、新たな事柄を発見するために大切である「帰納・類推」と、発見された事柄が常に成り立つことを説明するために大切な「演繹」があります。この数学的推論を生徒自身が意識して学習を進めていくために、「単元を貫く問い」を設定し、それぞれの有用性を生徒が実感できるよう工夫されています。

深い学びの実現に向けて❶～齊藤先生からの助言～

　第２学年の図形指導では、なぜ論証をしなければならないのか、論証をすることで生徒にとってどのような利点があるのかという「問いの自然性」が必要です。今回は数学的活動の A2 のプロセスの描き方を再考し、それをより具体的に提案するところに価値があります。学習対象を一つ観察しただけでは、その図形の構成要素や関係性に気付くことに難しさがあります。数学ソフトウェアなどを活用して図形を動的に見せ、それをじっくり観察させることで、生徒に発見があり、問いが生まれます。このように、問いを生み出すためには、生徒自身が学習対象をどのように眺めていくかが大切です。

数学科

令和３年１月 15 日（金）授業研究会

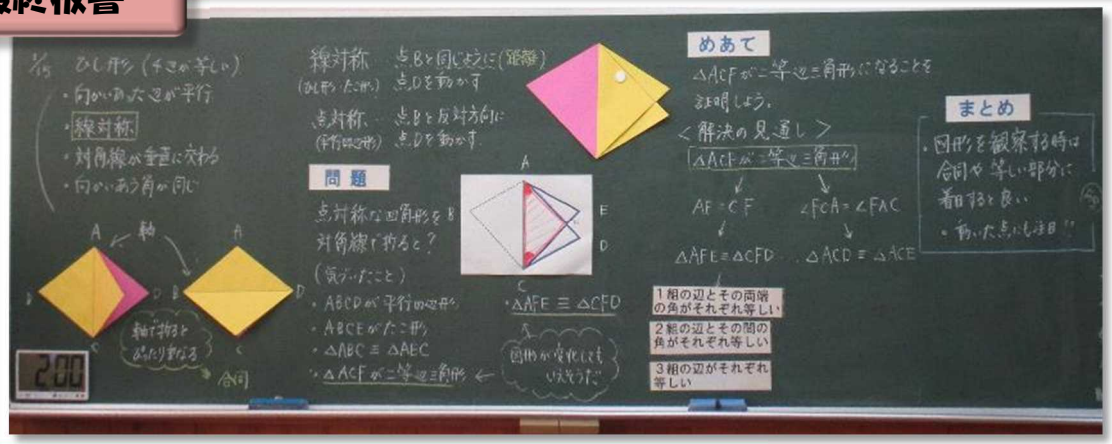
◆ 第２学年「図形の合同」 谷岡 名津美 教諭

授業を描く

本時の目標

＊図形の観察を通して推測したことを、論理的に考察し、表現することができる。

最終板書



ここがポイント③

これまでの指導では「▱ABCD を対角線 AC で折ったとき、△ACF が二等辺三角形になることを証明しなさい」のように、二等辺三角形になることを前提として証明に取り組ませることが主流でした。今回は図形の構成要素や対称性に着目し、図形をじっくり観察することで生徒はたくさんの性質に気付き、それをもとに授業が展開されていました。

ここがポイント④

数学ソフトウェアを活用し、生徒が発見した性質がいつでも成り立ちそうだと帰納的に予想させた上で、演繹的な証明の必要性を実感させました。また、解決の見通しをもたせる中で、一つの性質を証明したことが、生徒が予想した他の性質の証明にもつながることを、丁寧に押さえることができていました。

学びを振り返る

深い 学びの実現に向けて❷～齊藤先生からの助言～

全国学力調査Ｂ問題を目の前にして「習っていない」などと手出しできなかった過去を振り返ると、これからは「事象の裏側にどんな問題が内在しているのか」を自ら考えられる生徒を育成することが求められます。

例えば、数学的事象を数学化するプロセス(数学的活動Ａ２の局面)そのものが能力であり、この力を育成するためには学びの主体を生徒に戻すことが必要です。しかし、数学化しなければならないという意識が強すぎると導入が長くなり、数学的活動そのものが回らないばかりか、資質・能力の育成にもつながっていきません。事象とシンプルに出会わせ、これまでの経験との「ズレ」を考えることで「問い」を生徒自身に生起させ、そこから問いの解決に向けた学びを進めて行くことが求められます。

授業研究会を終えての 声

- 能力ベイスの授業をつくっていくために、「問題をつくり上げる能力」「数学の土俵に乗せる能力」をポイントにして、「問い」のある授業をつくっていきたい。
- 学びを生徒自身が推し進めていくための仕掛けやハードルを用意し、生徒が見方・考え方を働かせて主体的・対話的で深い学びを実現している授業を目指したいと思った。

本時の授業を再考する中で、自分自身の教材に対する見方が変化しました。今回取り組んだ証明は生徒にとって難しい内容ですが、だからこそ正解を求めるのではなく、つまずきを核に据えた授業、生徒主体となる授業を目指したいです。

谷岡名津美 教諭

「『主体的・対話的で深い学び』を実現するための実践研究事業」授業研究会レポート　No.3－⑤

美術

令和２年 12 月 18 日（金）教材研究会
◆ 第３学年　工芸「印鑑をつくろう」

単元を描く

単元を貫く問い

◆世界に一つの私だけの印鑑をつくるには？
～「イメージする・削る・彫る・磨く・使う」の活動を通して～

単元計画

- 印鑑の歴史や意義・使われ方に着目し、自分自身の印鑑をデザインする　活動
- 使いやすさや、美しさから握り部分の形を考え、意見交流を通して展開図に表す　活動
- 加工する過程や場所に応じて道具を選択し表現する　活動
- 自他の作品を鑑賞して、見方や感じ方を深める　活動

問題　自分だけの印面をつくるには？【5時間】

印面のデザイン・彫り・押印

●単元の目標確認（1時間）

- 単元の流れ確認する
- てん書について知る
- 印面の形を考える
- デザイン化する

●石材に写し彫刻・押印（4時間）

- デザイン化したものをトレーシングペーパーに写し取る
- 耐水ペーパーで石材を磨く
- トレーシングペーパーを反転し、石材との間にカーボン紙を挟み転写する
- てん刻刀を使用し、凹部を彫る
- ワークシート及び学級シートに押印する

問題　自分だけの鈕（つまみ）をつくるには？【6時間】本時1／6

鈕（握り部分）のデザイン・彫り・磨き

●鈕のイメージづくりをする（本時）

- 具象形と抽象形について知る
- 油粘土で造形する
- 作品を見合う
- ワークシートにイメージを表現する

●鈕の彫り・磨き（5時間）

- 展開図に起こし、石材に写す
- 彫刻刀や棒やすりで彫る、削る
- 小刀や耐水ペーパーで形を整え、トレーシングペーパーでツヤを出す

問題　自分らしさを分かち合うためには？【1時間】

鑑賞・まとめ

●取り組みを振り返り、他者の作品を鑑賞する

- 印面のデザイン化や鈕の抽象デザインで工夫した（意図した）点や難しかった点などを振り返る
- それぞれの作品について鑑賞し、造形的なよさを出し合う

「具体の評価規準」から
「見方・考え方を働かせて学ぶ姿」へ

ここがポイント①

題材の価値と学びの連続性

今後の生活で身近なものになる「印鑑」を題材とし、自分だけの価値を考えて表現させる「問い」が設定されています。問いの解決に向けて、印面（平面的思考）から握り部分（三次元の立体的思考）へ発展的に取り組ませる単元構想となっています。

ここがポイント②

見方・考え方を働かせる手立て

見方・考え方を働かせる生徒の姿として、印としての機能を意識し、造形的な視点から抽象形のよさを捉えて構想を練る姿が設定されています。そのための手立てとして ICT や油粘土を活用し、生徒がイメージを形にしやすくなるように工夫しています。

深い　学びの実現に向けて❶～齊藤先生からの助言～

◆美術の目標を改めて確認し、柱書(1)～(3)の視点からの授業づくりを行うことが求められます。
- 対象や事象を造形的な視点で捉え、表現方法を創意工夫すること。
- 造形的なよさや美しさ、働きなどに注目し、主題や構想に関心をもちながら、文化について考えや感じ方を深めること。
- 自分にとっての価値や意味を感じることで美術を愛好する心を育み、それが生活創造につながるようにすること。

◆これらの「能力」が身に付いた姿（内容の深い理解に基づいて学んでいる生徒の姿）を教師がイメージできるのか、ということが重要です。

美術

令和３年１月１５日（金）授業研究会

◆ 第３学年　工芸「印鑑をつくろう」 尾崎　浩史教諭

授業を描く

本時の目標　＊使いやすさや美しさを考えて構想を練り、イメージを抽象形で表すことができる。（6／12）

ここがポイント③

学びの全体像を生徒と共有する

生徒は試行錯誤しながら「上昇」というイメージを抽象形で表現していました。その際に、「なぜ抽象形を考えるのか」という学習活動のねらいや、単元における位置づけを生徒と共有することが大切です。

本時は「イメージを抽象形で表現するための練習の時間」という位置づけでした。それを確実につかませることで、生徒たちは見方・考え方を働かせ、より自覚的に学ぶことができます。

ここがポイント④

油粘土のよさを生かして学びを深める

油粘土を使用した立体的な思考により、リアルなイメージを形にすることができます。何度もやり直しのできる油粘土だからこそ、生徒は失敗を恐れずに表現していきました。

イメージがまだ曖昧な生徒には、「本当にそのイメージになっている？」「上から（横から）見たら？」と問いかけ、イメージの見直しを促します。この教師の声かけが、生徒の学びを深める支援となります。

学びを振り返る

深い　学びの実現に向けて❷～齊藤先生からの助言～

生徒は三つの視点（①目的や条件　②使う者の立場　③機能や美しさ）を行き来しながら総合的に思考し、表現を構想します。本時では、特に「使いやすさ（機能）」と「美しさ（芸術的な価値）」の調和がポイントでした。

作品づくりを行いながらその調和を問い続ける生徒たちを、教師がどう支えるのか、またその姿をどう見取っていくのかが重要です。本単元に限らず、この点を意識した授業づくりが求められています。

授業研究会を終えての 声

- 教科ならではの学習活動の中に、能力は埋め込まれているという点を意識したい。
- 「抽象」という概念に出会う学びのプロセスについて、まだまだ考えていきたい。
- 方法論ではなく、能力で分析するということを大切にしていきたいと感じた。授業改善と学習評価をしっかりとつなげていきたい。

「抽象」を考えさせる上で貴重な機会となりました。形を油粘土でイメージする場面では、個人よりグループでの思考が発想を展開しやすいことを実感しました。導入の説明を更に精選・短縮し、生徒にもっと思考させる時間を設定し、資質・能力を育成する授業を目指していきたいと思います。

尾崎　浩史　教諭

2018 → 2019 → 2020

次代の学びを創る in 西部

第１部では、中村中学校の教科等横断的な授業づくりについて、第２部では、これからの資質・能力ベイスの授業づくりについて、次代の学びの方向性を共有しました。

第１部：ポスターセッション
教科等横断的な授業づくりをどう推進したのかを語る

授業づくりの行動統一

中村中学校の授業づくりのモットーは、「生徒は全教科を一人で学んでいる」です。これは、「資質・能力の育成には、各教科の学びがつながっていくことが重要であり、そのためには、各教科の授業づくりが揃うことが大切である。」ということを意味した齊藤先生からの言葉です。研究主任の田村先生より、このモットーに基づき、授業づくりの行動統一をどのように図ってきたのかについて、紹介されました。

授業づくりの視点を可視化

中村中学校では、「各教科目標の柱書で授業をゴールから描く」ことの行動統一を図るために、学習指導案表面に柱書の３点を構造的に配置しています。資質・能力の系統性や柱書の関係、教科の特質等における工夫・改善について、学習指導案表面の変遷から、紹介がありました。

ミドルリーダーが語る

教科等横断的な視点に立った授業づくりを進めるためには、他教科の学びを理解しておくことが前提になります。白石先生からは、単元配列表に学習活動や見方・考え方などを明記した「カリキュラムマップ」を作成し、各教科の学びを可視化することで、他教科の学びをイメージできる工夫が紹介されました。

カリキュラムマップを基に各教科の学びをつなぎ、教科等横断的な視点に立った授業実践が紹介されました。数学科であれば社会や美術、国語科であれば理科や音楽など、様々な教科を横断して授業を行うことで、教師の意識だけでなく、生徒も各教科のつながりをより実感していっているという紹介がありました。

各教科の学びを可視化

教科等横断的な授業実践

若年教員が語る
新たな授業づくりの扉を開く

資質・能力ベイスで描くという新たな方向性が示され、「授業づくりの始発点や学びのゴールを変える」など、新たな授業づくりの扉が開きました。
齊藤先生がプロンプターとなり、中村中学校の若年教員が語った、新たな授業づくりでの学びを紹介します。

能力ベイスの授業にChallenge

◆資質・能力ベイス授業づくりで大切にしていること

- 毎時間の授業を切り離して考えず、授業のつながりを大切にして、単元で授業を描くことが大切だと思います。さらに、「単元終了時に目指す生徒の姿」を明確にして、そのゴールから毎時間の授業を描いています。
- 未知の場面に出会った時に、生徒自身がこれまで獲得した見方・考え方や資質・能力を活用して課題解決できることを重視しています。これまでと異なった視点から考察させ、事象を変えたらどうなるかという問いを持たせたり、つながりを意識させたりしながら授業づくりを行っています。

◆近未来をイメージし、行動統一を図った授業づくりをしてきての学び

- 教科を越えて授業づくりをすることで、自分の教科の授業づくりが広がりました。また見方・考え方や、学習活動を通して資質・能力を身に付けていくことは全教科共通であり、その視点で他教科を参観することで、教科を越えて議論できるようになりました。
- 次代を生きる生徒には、教科の学びを切り離して考えるのではなく、教科等横断的に考えていくことが大切であると考えるようになりました。全教科で横断的に取り組むことで、生徒の学びもつながっていっているように感じます。

教科等横断的な学びの推進

第２部：パネルディスカッション
これからの資質・能力ベイスの授業づくりを語る